

回復される均衡——元雜劇「緋衣夢」試論

廣瀬 玲子

はじめに

元雜劇「錢大尹智勘緋衣夢」（以下「緋衣夢」と略す）は関漢卿の作として伝わる裁判劇で、判決を下すのは開封府尹の錢可である。錢可は関漢卿作の別の雜劇「錢大尹智寵謝天香」（以下「謝天香」と略す）にも開封府尹として登場し、髭面の容貌から同一人物と考えられる。タイトルを並べてみると二つの作品は一对のもの、あるいは何らかの対応関係があるもののように予想されるが、実は「謝天香」は裁判劇ではない^①。

「謝天香」は『元曲選』にも収められているが、「緋衣夢」は収められず、脈望館抄本（ただしタイトルは「王閨香夜月四春園」^②）・脈望館古名家雜劇本・顧曲齋古雜劇本の三種のテキストが伝わっている。抄本には作者名は記されず、刊本である古名家雜劇本と古雜劇本には関漢卿の名が記されている^③。

嚴敦易は古雜劇本のみに基づいて次のように述べる。「劇全体が読者に与える印象から考えると、顧曲齋に基づいた底本はおそらく俳優のあいだで流传していた錯誤の多い蕪雜なテキストで、不備な点があり妥当とは言えない。念

入りな選択を行った臧晋叔は、このような雑劇を『元曲選』に入れようとは思わなかったのだ⁽⁴⁾。

一方、小松謙は抄本と刊本二種との差異を次のようにまとめている。「具体的には、抄本の方がセリフの量がかかるに多く、「断」〔幕切れに高位の役人などが詩や詞を吟ずること〕も抄本にしか付されていない。更に注意されるのは、第二折と第三折の間にあたる部分に、抄本にのみ「浄官人」による裁判の場面が存在することである。これはいわゆる院本挿演の一例といえよう。ところが二つの刊本にはこの場面がない。従って刊本においては、第二折の末尾で無実の罪で捕らえられた李慶安が、第三折ですすでに一度裁判の結果死刑を宣告された人間として現れ、非常に不自然である。これはやはり、抄本の方が原形に近く、刊本はそれを省略した結果、不自然な展開になったと見るべきであろう⁽⁵⁾」。

抄本と刊本は、このほかにも折の区切り方や曲詞に異同が見られるが、共通する字句も多いため、無関係ではありえない。この抄本のテキストあるいはそれに類する冗漫なテキストを刈り込みつつ改変して刊本のテキストが作られたと推測される。『録鬼簿』や『太和正音譜』には「緋衣夢」(あるいは「非衣夢」)が関漢卿の作として記載されているが、抄本には作者名が記されずタイトルも異なる。テキストの刈り込みや改変を行ったのが関漢卿であるのかもしれないが、断定することはできない。そこで本稿では、作者が誰かということは問わないこととして、現存する三種のうち、古いかたちを残していると考えられる抄本によってこの作品を読み解くことにする⁽⁶⁾。

右に引用したように刊本の不自然さはすでに指摘されているが、では抄本はどのようなテキストなのだろうか。実は抄本も一読したかぎりではかなり奇妙な作品である。あたかも、裁判劇に共通する構造に、他の劇に見られる諸要素を無理やり詰めこんだかのような印象を与えるのである。しかし、それは本作品の欠点ではなく、むしろ演劇本来

の要請に従ったものではないか。本稿は「緋衣夢」の構造と随所に配置されている類型的要素を明らかにし、演劇としての元雑劇の特徴の一つを提示したい。

一 「緋衣夢」のあらすじ

ではまず抄本によってあらすじを述べよう。本劇は四折から成り、楔子はない。

第一折（正旦は王閨香、場所は王家）

汴京（開封）の金持ち王員外（姓名は王得富）の娘である閨香と李員外（姓名は李栄祖）の息子の慶安とは両家の定めた許婚であったが、李家が貧しくなったため王員外は婚約解消の申し入れをする。その日、李慶安は風がよその家の庭木に引っかけたため、木に登って取ろうとする。そこは王家の庭であり、出会った閨香は、結婚費用に充てる金品を用意して梅香はしあから渡すので夜に家に来るようにと慶安に伝える。

第二折（正旦は王閨香、場所は王家→李家→役所）

同じ日、ごろつきの裴炎は王員外の営む質屋で衣服を質入れしようとして断られたのを恨んで、夜に一家を皆殺しにしてやろうと決める。日が暮れると裴炎は塀を越えて王家の庭に忍びこむ。折しも李慶安に渡すための金品を持った梅香が現れ、裴炎は梅香を刺殺し、金品を盗んで逃げる。そのあと慶安が塀を乗り越え、梅香の死体を発見して逃

げる。さらに閨香がやってきて梅香の死体を見つける。両親とともに慶安が犯人であると断定し、李家へと向かう。かたや李家では、帰ってきた慶安が王員外の家で梅香が殺されていたことを父に話す。そこへ王員外夫婦がやってきて、戸口に血が付いており慶安の手にも血が付いているのを見て犯人と決めつけ役所へ連れていく。

役所では官人の賈虚が取調べをする。拷問を受けた慶安は自白して死刑囚となる。

そこへ新しい官人の銭可が着任して文書改めをする。李慶安は銭可に呼ばれて役所に向かう途中で蜘蛛の巣にかかった蠅を見て、助けてやるようにと父に頼む。銭可は凶器の包丁が慶安に似つかわしくないため疑念をいだきつつも、判決に「斬」の一字を書こうとする。すると蠅が邪魔をして文字を書くことができない。冤罪であろうと推測した銭可は、慶安を獄神廟で眠らせてその寝言を胥吏に書き取らせる。寝言には真相を解き明かすための手がかりが含まれており（詳細は後述）、銭可は部下の寶鑑と張弘の二人に捜査を命じる。

第三折（正旦は茶三婆、場所は碁盤街井底巷の茶店）

茶博士（茶館の店員）と妻の茶三婆の茶店に寶鑑と張弘がやってくる。そこへ裴炎が登場して三婆に売れ残りの犬肉を無理やり買わせようとする。この乱暴者の名が裴炎であると知った役人たちは策をめぐらし、張弘が行商人に扮して凶器の包丁を売り物にしていると、通りがかった裴炎の妻が自分の家の包丁だと主張し、捕らえられ打たれて白状する。折しも裴炎は犬肉の代金を取りに戻ってきて、妻とともに役所に連行される。

第四折（正旦は王閨香、場所は役所）

役所で待つ錢可の前に裴炎が連れてこられ、犯行を自供する。李慶安が釈放されるや、今度は李員外が王員外を訴える。閨香は父に頼まれて李員外と慶安をなだめるが、殺人犯が見つかっていなければ息子が死刑になっていたと考える李員外は、なかなか納得しない。王員外は、許してもらえなら三千貫の嫁入り道具持参で閨香を慶安と結婚させることに決める。閨香はそれを慶安に伝え、慶安が説得すると父はしぶしぶ許すことにする。錢可は裴炎に死刑を宣告、竇鑑・張弘に報償を与え、慶安・閨香の婚礼の祝宴の費用を提供することにする。

二 抄本と刊本の差異

以上が抄本のあらすじであるが、ここで刊本との差異をまとめておこう。両者の構成上の差異は、小松謙も指摘していたとおり、一つめの裁判の場面の有無である。あらすじからもわかるように、抄本の第二折は内容が盛りだくさんである。まず殺人が起こり、李慶安が訴えられる。役所では無能な役人の賈虚（仮虚と同音）が慶安を拷問して自白させ、死刑囚として獄につなぐ。次に開封府尹錢可が取調べをして疑問に思い、部下に捜査を命じる。つまり、裁判が役人を替えて二回行われるわけだが、刊本には、最初の無能な役人による裁判の場面が存在しない。^⑦

しかも刊本では、この抄本第二折の最後の部分、すなわち錢可が慶安と対面し取調べをする場面のみが第三折とされている。そのため、刊本の第三折は、曲が皆無でせりふしかない。さらにその結果、刊本では、抄本の第三折と第

四折が合わせて一折（＝第四折）となり、第四折は途中で曲調も歌唱者も変わるといふ元雜劇としては破格の構成となっている。この点だけでも、刊本が既存の本を改変したことで構成上のバランスを欠いてしまったことがわかるだろう。

ただし、より古いかたちと考えられる抄本にもつじつまの合わないところがあり、刊本がそれを修正しようとする場合もある。それらを注記しながら、抄本の特徴を劇の構造と展開にしたがって詳しく考察することにしよう。

三 劇の構造と展開

① 婚姻の解消と成就——劇の枠組み

まず、この劇の大枠を確認しておきたい。⁸⁾

汴京の金持ち王得富（以下、王員外）は、かつて同じ街の李員外と「指腹成親」、すなわち子供たちが母親のお腹の中にいる段階での婚約を交わしていた。この二人の子供たちが王閨香と李慶安である。王員外とその妻は、娘が十六歳になった今、窮乏する李家に娘を嫁がせるわけにはいかないと考え、妻は夫に頼まれて、李家に十両の銀子と閨香手作りの鞋を届けに行く。

（姆姆云）無事可也不来、俺員外的言語、要和你悔了這門親事、与你這十両銀子、這双鞋兒、是罷親的鞋兒、着慶安躡断脚線兒、便罷了這門親事也。（李老兒云）姆姆、那里有這等道理来。等我孩兒来家与他商量。（姆姆云）我不管你、鞋兒銀子交付与你。我回員外話去也。

(王閨香の) 母いう) 用がなければ来ませんよ。うちの旦那がお宅との結婚話はなかったことにすると言っています。この十両の銀子をさしあげて、この鞋一足は婚約解消の鞋ですので慶安さんに履いて糸を断ち切ってもらってください。それでこの結婚話は終わりです。(李員外いう) 奥さん、どこにそんな道理があるでしょう。息子が帰ってきたら相談させてください。(母いう) お前さんがどうしようと思わないけれど、鞋と銀子はお渡ししましたからね。わたしは帰って旦那に報告しますよ。

指腹成親の約束も王家にとつては財産があればこそその話であり、李家が貧しくなるとさっさと縁を切ろうというのである。李員外は悔し涙に暮れるが、家に帰ってきた李慶安は父をなくさぬため、婚約解消には頓着しない。もらった鞋をはき、今まで買えなくて学友に馬鹿にされていた風を買うため、父に銭をもらって遊びに行く。

慶安が買った風を揚げていると強風にあおられて人の家の庭の梧桐の木に引っかかってしまう。塀が低いので乗り越えて庭に入り、鞋を脱いで木に登ると、そこへ閨香と梅香がやってくる。都合のいい話だが、王員外の屋敷だったのである。

(梅香云) 姐姐、你天生的花容月貌、這幾日可怎生清減了、可端的為何也。

【天下楽】 想起俺那指腹的這成親李慶安。

(梅香云) 姐姐、您想那窮弟子孩兒怎的。(正旦云) 這妮子、你也嫌他窮。(唱)

嗔人這家也波寒、休將人小覷看、今日個窮薄了也是他無奈間。俺父親是王半州、他父親是李十萬。

(帶云) 人有七貧七富、人有且貧且富。(唱)

天那、偏怎生他一家兒窮薄難。

(梅香云) 姐姐、比及你這般想他、你可不好瞞着父親母親送与他些金銀錢鈔、倒換過來做他的財禮錢、教他来娶你可不好。(正旦云) 梅香、多承你顧愛、我怕不也有此心、争奈我是女孩兒家、一時間耽不下也。(梅香云) 姐姐、放着梅香里、不妨事。(正旦云) 梅香、俺繞着這花園内是看咱。梅香、那樹下不是一双鞋兒。你取将来看咱。(梅香云) 理会的。姐姐、委的是双鞋兒。姐姐看。(正旦看科、云) 這鞋不是我做与李慶安的。可怎生放在這里。梅香、樹上不是個人影兒。

(梅香いう) お嬢さま、お嬢さまの天性の花のかんばせも、ここ何日か影が差したよう。いったいどうなされたのですか。(王閨香)

(うた) 生まれる前からの許婚の李慶安さんを思えば。

(梅香いう) お嬢さま、あんな貧乏人の息子を思っておられるのですか。(王閨香いう) この子ったら。おまえも貧乏なのを嫌うのね。(うた)

その家が貧しいからといって軽んじてはいけません。今貧しくなってしまったのも仕方のないこと。わたしの父は王半州、あの人の父は李十万と呼ばれたのに。

(入れぜりふ) 人が何度も貧しくなったり裕福になったりするのも世の定め。(うた)

天よ。どうしてあの人の家だけが貧乏の苦しみを味わうのか。

(梅香いう) お嬢さま、そんなに思っておられるのなら、父上と母上に内緒でお金を贈り、それを結納金にしてお嬢さまを妻に迎えてもらえばよろしいのでは。(王閨香いう) 梅香、考えてくれてありがとう。わたしもそういう気持ちはあるのだけど、女の子にすぐにできることではないわ。(梅香いう) お嬢さま、この

梅香にお任せくださってかまいませんよ。(王閨香いう) 梅香、このお庭をぐるりと歩いて見てみましょう。梅香、あの木の下にあるのは鞋じゃないかしら。持ってきてみて。(梅香いう) はい。お嬢さま、やっぱり鞋ですよ。ご覧ください。(王閨香見るしぐさをしていう) この鞋はわたしが李慶安さんのために作ったものだけ。どうしてこんなところにあるんでしょう。梅香、木の上に誰がいるのかしら。

梅香は木の上にいるのを見つけて声をかけ、下りてきた李慶安は鞋をはいて王閨香と対面する。

(李慶安做見正旦云) 小娘子支揖。小生不合擅入花園、望小娘子寬恕咱。(正旦云) 万福。你那里人氏、姓名名誰。

(李慶安云) 小生是李員外的孩兒、喚做李慶安。因放風箏兒耍子、不想落在你家梧桐樹上抓住了、我来取風箏兒来、

小娘子恕小人之罪。(正旦云) 誰是李慶安。(李慶安云) 則我便是李慶安。(正旦云) 你認的那指腹成親的王閨香麼。

(李慶安云) 小生不認的。(正旦云) 則我便是王閨香。(李慶安云) 原来是王閨香小姐。天使其然、在此相会。恕

小生之罪也。(正旦云) 你因何不來娶我。

(李慶安、王閨香にあいさつしていう) お嬢さんこんにちは。勝手にお庭に入って申し訳ありません、どうかお

許してください。(王閨香いう) こんにちは。あなたはどこのお方でしょうか。お名前は。(李慶安いう) わたくし

は李員外の息子の李慶安と申します。風を揚げて遊んでいたら、思いも寄らぬことにお宅の梧桐の木に引っかかっ

てしまい、取りに来たのです。お嬢さん、どうかわたくしの罪をお許してください。(王閨香いう) 誰が李慶安ですつ

て。(李慶安いう) わたくしが李慶安ですが。(王閨香いう) 指腹成親の王閨香とは顔見知りですか。(李慶安いう)

いいえ。(王閨香いう) わたしがその王閨香です。(李慶安いう) なんと王閨香さんでしたか。ここでお会いでき

たのも天の計らいというもの。どうか罪をお許してください。(王閨香いう) どうしてわたしを妻に迎えてくださ

らないのですか。

先の曲詞では、王閨香は李慶安のことを思つてふさぎこんでいるのだが、親たちが定めた許婚の二人はこのときが初対面なのである。閨香の問いに対して慶安は、家が貧しくなったため結婚できないのだと答える。すると閨香は、先に梅香が提案したように、「金珠財宝」¹⁾を用意するので今晚この庭に来てくれるようにと頼む。梅香に託して慶安に金品を与え、それを結納金に換えてもらおうというのである。慶安は喜んでこの申し出に応じ、太湖石のそばで会う約束をする。ここまでが第一折である。¹²⁾

財力に格差が生じたために暗礁に乗り上げていた両家の婚姻は、このときには思いも寄らなかつた経緯をたどつた末に成就することになる。冒頭での婚姻関係の危機から、結末における逆転的な団円まで——それがこの劇の大枠となつていたのである。

② 犯行とその証拠——凶器と血痕

①に示した大枠のなかで展開するのが冤罪事件である。これについては②から⑤に分けて順に説明する。既述のとおり第二折は異常に長い折であり、場面や人物も次々と入れ替わる。場所は、王員外の家から李員外の家へ、さらに役所へと移動するが、王閨香による歌唱はすべて王家の庭の場面(次の4に当たる場面)に集中している。では、場面ごとに登場人物の入れ替わりを示しつつ、詳しく見ていこう。

〔王員外の家〕

1 王員外と裴炎・王員外が登場し質屋を開店する。裴炎が登場し、質入れを断られ、腹いせに当夜一家を皆殺しに

することに決めて退場。王員外は店じまいをして退場。

2 裴炎と梅香・同じ日の夜、裴炎が登場して王家の花園にしのびこむ。そこへ梅香が李慶安に渡す金品を持って登場。裴炎は梅香を刺殺し、一家皆殺しはやめて金品を奪って退場。

3 李慶安・登場して花園にしのびこみ、梅香の死体につまずく。手に血が付き、あわてて退場。

4 王閏香・母・王員外・王閏香は、梅香の様子を見るために登場。花園で梅香の死体を見つけて驚き、母親を呼ぶ。母親は登場して閏香から李慶安との約束のことを聞き、犯人を慶安と決めつけて役所に訴えようとはやる。呼ばれて王員外も登場し、やはり犯人は慶安にちがいないと言って、妻と二人で李家に向かう。一同退場。

ここはこの一折で王閏香のうたが入る最後の場面でもあるので、引用しよう。

(王員外上、云) 姆姆、這早晚你叫我有甚事。(姆姆云) 不知甚麼人殺了梅香。丟下一把刀子。(王員外云) 嗨、有甚麼難見處、則是李慶安這個小弟子孩兒、為我悔了親事也、他殺了我家梅香、更待干罷。姆姆、將着刀子、我如今隨着脚踪兒直到李慶安家、試探他那虛實。走——遭去。(正旦云) 姆姆、你看這刀子、則怕不是他麼。(姆姆云) 可怎生便知不是他。(正旦唱)

【尾声】這場人命則在這刀一口。量這個十四五的孩兒、姆姆也、他怎做的這一手。止不過傷了浮財、損了人口。若打這場官司再窮究、和父親解取。休惹那事頭。

(正旦云) 常是慶安無話説、久後拿住殺人賊呵、(唱)

我則怕屈壞了他平人、姆姆也、嗒可敢到罷手。(下)

(王員外登場していう) おい、こんな時間に何の用だ。(王閏香の) 母いう) 梅香が誰かに殺されたんですよ。

包丁を残して行きました。(王員外いう) 簡単なことさ。あの李慶安の小僧め、わしが婚約を解消したものだからうちの梅香を殺したのだ。このまま済ますわけにはいかん。おい、包丁を持って今からやつを追いかけ、李慶安の家まで行つて白黒つけてやることにしよう。(王閏香いう) 母さん、この包丁を見て。あの人ではないのではないかしら。(母いう) あの子でないとは限りませんよ。(王閏香うたう)

(うた) 人の命を奪つたのはこの包丁、十四や十五の少年であることを思えば、母さん、あの人にどうしてそんなことができましよう。ただはした金を奪われ、使用人を失つただけのこと。役所に訴えるならもう一度よく考え、お父さんと一緒に何とかして、騒ぎを起こすのはやめましよう。

(王閏香いう) もし慶安さんが申し開きできず、あとで殺人犯が捕まるなら、(うたう)

わたしが恐れるのは罪のない人の命を奪うこと。母さん、むしろ手を引いたほうがいいのではないでしようか。(退場)

殺人犯は現場に包丁を残していたのだが、その凶器が文弱なる李慶安にそぐわないことから、閏香は犯人は別人ではないかと疑問をいだく。そもそも梅香は、李慶安に金品を渡すはずであったのだから、殺す理由もないわけだが、そのことが問われることはない。このあと第二折に王閏香は登場せず、せりふのみの場面が続くことになる。

〔李員外の家〕

李員外・李慶安・王員外・その妻・李員外が登場。慶安はどこに行つたのか案じているところへ、慶安が帰宅して登場。王閏香との約束のこと、梅香が死んでいたことをすべて父に話す。そこへ王夫婦がやってくる。

(王員外同姆姆上) (王員外云) 来到也。姆姆、正是他殺了梅香来、門上兩個血手印。開門来、開門来。(開門科)

(李老兒云) 我開開這門、老員外家裡來、有甚麼事這早晚到俺這里。(王員外云) 老畜生、你還說嘴里。你家慶安做的好勾當、見俺悔了這門親事、昨夜晚間把我家梅香殺了。你還推不知道里。(李老兒云) 俺孩兒是讀書的人、他怎肯做這等的勾當、不干俺孩兒之事。(王員外云) 不是他、可是誰。你舒出手來。(李慶安云) 父親、不干您孩兒事。(王員外云) 既然不是你、舒出手來。(李慶安做舒手科、云) 兀的不是手。(王員外云) 好阿、兩手鮮血、還不是你里。正是殺人賊。明有清官、我和你見官去來。(王員外扯李慶安科) (李慶安云) 天那、着誰人救我也。(同下)

(王員外、妻と登場) (王員外いう) 着いたぞ。ほら、やっぱりやつが梅香を殺したのだ。戸口に血の付いた手の跡が二つある。開けてくれ、開けてくれ。(戸を開けるしぐさ) (李員外いう) はい開けますよ。どうぞお入りください。こんな時間に来られるとは何のご用でしょう。(王員外いう) 老いぼれめ、まだ言い逃れるつもりか。おたくの慶安がやつてくれたじゃないか。わしに婚約を解消されたものだから、昨夜遅くにうちの梅香を殺したんだ。まだ知らぬふりをする気か。(李員外いう) うちの息子は学問をしていますから、そんな大それたことをするわけではない。息子には関係のないことでしよう。(王員外いう) やつでなければ誰がいる。ほれ、手を見せてみる。(李慶安いう) 父さん、わたしは関係ありません。(王員外いう) おまえでないのなら手を見せてみる。(李慶安手をさし出すしぐさでいう) はい、手を見せましょう。(王員外いう) やっぱり。両手が血で真っ赤なのにおまえじゃないというのか。紛れもなく殺人犯だ。人の世にはりっぱなお役人がいるからな。さあ一緒に役所に行こう。(王員外、李慶安をひっぱるしぐさ) (李慶安いう) 天よ。誰か僕を助けてくれますように。(ともに退場)

③取調べ

このあとすぐに続くのが役所の場面である。先述したように、役所ではまず無能な官人の賈虚が取調べをする。その場面は以下のように進む。官人の賈虚、胥吏の外郎、小者の張千が登場。そこへ王員外が李慶安・李員外を連れて登場する。王員外は指で合図をして外郎に賄賂を贈ることを知らせて退場。外郎は慶安を拷問して自白させ、府尹が来て判決を下すまで死刑囚の牢屋に入れる。慶安は枷をはめられ、ぬれぎぬだと嘆きながら李員外とともに退場。外郎と官人も相次いで退場して終わる。

続いて錢可の取調べである。この場面は本劇の山場であるので引用をまじえて詳しく見ていこう。まず、開封府尹の錢可が外郎と登場し、文書改めを行う。外郎が囚人の李慶安の一件の死刑判決を促すので、錢可が李慶安を召喚する。慶安は李員外とともに登場する。¹⁴

(官人云) 令史、這一宗是甚麼文卷。(外郎云) 在城有一人是李慶安、殺了王員外家梅香、招状是実、等大人判個斬字。(官人云) 那罪囚有麼。(外郎云) 有。(官人云) 与我拿將過來。(張千云) 理会的。(李慶安帶枷同李老兒上)

(李老兒云) 孩兒怎生是好。如今新官下馬、如之奈何。(李慶安云) 父親、你看那蜘蛛羅網裏打住個蒼蠅。父親、你与我救了者。(李老兒云) 孩兒、你的命也顧不的、且救他。(李慶安云) 父親、依着你孩兒、替我救了者。(李老兒云) 依着你、我与你救了者。(李慶安云) 我救了你非災、何人救我這橫禍。

(錢可いふ) 令史、これはどんな文書かね。(外郎いふ) この街に李慶安という者がおりまして、王員外の家を梅香を殺したのです。供述も確か府尹どのに「斬」と判決を記していただくのを待っております。(錢可いふ) その犯人はいるか。(外郎いふ) おります。(錢可いふ) 連れてきてくれ。(張千いふ) かしこまりました。(李慶

安が枷をはめて李員外とともに登場（李員外いう）せがれや、どうすればよからう。いま新しいお役人が着任されたが、どうすればいいことか。（李慶安いう）父さん、ほら、あの蜘蛛の巣に青蠅が引っかかっていますよ。父さん、僕に代わって助けてやってください。（李員外いう）せがれや、自分の命がどうなるかわからないのも構わず、蠅を助けるのかい。（李慶安いう）父さん、僕の言うことを聞いて助けてやってください。（李員外いう）言うとおりにする。おまえに代わって助けるよ。（李慶安いう）〔青蠅に〕おまえを災難から助けてやったが、この僕の身におぼえのない禍は誰が助けてくれよう。

府尹の召喚に応じる途中で蠅の命を救うという唐突な展開であるが、これはすぐあとの出来事のための伏線である。慶安に直面した錢可は、このような少年が凶悪な殺人犯であるとは信じられず、無実ではないのかと疑う。そこで、申し開きがあるなら述べるようにと促すが、慶安は「大人可憐見、我無了詞因也」（お役人さま、お憐れみください。申し開きすることは何もありません）¹⁵と云う。外郎が持ってきた凶器の包丁を見て、錢可の疑いはますます深まる。

（官人云）這小的便怎生拿的偌大一把刀子、這把刀子必是個屠家使用的。其中必然暗昧。（外郎云）大人、前官断定、請大人判個斬字、便是典刑。（官人云）既然前官断定、將筆來、我判個斬字。（判字科云）一個蒼蠅落在筆尖上。令史、赶了者。（外郎云）理会的。（做赶科）（官人又判字科、云）可怎生又一個蒼蠅抱住筆尖。令史、与我赶了者。（外郎赶科、云）理会的。（官人判字科、云）你看、這個蒼蠅兩次三番抱住這筆尖、令史、与我拿住者。（外郎拿住科、云）大人、我捉住了也。（官人云）裝在我這筆管裏、將紙來塞住。看他怎生出來。（外郎拿住入筆管塞住科）（官人又判字科、爆破筆科）（官人云）好是奇怪也。（…）這事必有冤枉。令史、將這小厮枷鎖開了、拿他去獄神廟裡歇息。將着一陌黃錢燒了那紙祈禱了。你到拽上那獄神廟門、你將着紙筆、看那小厮睡中說的言語、你与我写

将来。(外郎云) 理会的。

(錢可いう) こんな若造がどうしてこのような大きな包丁を使えようか。この包丁は肉屋が使うものにちがいない。この事件にはきつと何かあやしいところがあるぞ。(外郎いう) 長官どの、前任者の裁きが済んでおりますので、「斬」と判決を下していただければすぐに死刑を執行いたします。(錢可いう) 前任者の裁きが済んでいるなら、筆を持ってきてくれ。「斬」の判決を下そう。(判決文を書くしぐさをしていう) 青蠅が一匹、筆の先にとまっている。令史、追いはらえ。(外郎いう) かしこまりました。(追いはらうしぐさ) (錢可が再び判決文を書くしぐさをしていう) なんとまた青蠅が筆の先にしがみついたぞ。令史、追いはらってくれ。(外郎追いはらうしぐさでいう) かしこまりました。(錢可、判決文を書くしぐさをしていう) 見ろ、この青蠅は二度三度と筆の先にしがみつくぞ。令史、つかまえてくれ。(外郎つかまえるしぐさをしていう) 長官どの、つかまえました。(錢可いう) この筆の軸のなかに閉じこめて紙でふたをして、どうなるか見てみよう。(外郎つまんで筆の軸に入れて閉じこめるしぐさ) (錢可がまた判決文を書くしぐさ、筆が壊れるしぐさ) (錢可いう) なんと不思議なこと。(…)

この件はきつと冤罪であろう。令史、この若者の枷や鎖を外し、獄神廟へ連れて行って眠りにつかせるのじゃ。紙銭百文を持って行って焼き、祈りを捧げよ。獄神廟の扉を閉めたら、おまえは紙と筆を用意して、その若者が眠っているあいだにしゃべる言葉を書き取ってわしのところへ持ってきてくれ。(外郎いう) かしこまりました。慶安に助けもらった蠅の恩返しによって、錢可は「斬」の判決を書くことができない。錢可はそれを、この一件に何かまちがったところがあることを教える天の計らいと考える。そして命じたのが獄神廟で容疑者を眠りにつかせ、寝言を記録させることであつた。

(腫科、云) 非衣両把火、殺人賊是我。赶的無処蔵、走在井底趨。

(眠るしぐさでいう) 赤い服を着てたいまつを二本持つ¹⁷⁾、殺人犯はおれ。急いで隠れる場所もなく、井戸の中に身をひそめる。

これが寝言である。外郎が書き取って銭可に渡すと、銭可はその意味を解き明かしてゆく。

(官人云) (…) 這四句詩内必有殺人賊。我再看咱。非衣両把火、這名字則在這頭一句裡面。這衣字在上面、非字在下面、不成個字。非字在上、衣字在下、可不是個裴字。那両把火並着兩個火字、可也不成個字。上下兩個火字、不是炎熱的炎字。這殺人賊不是姓炎名裴、便是姓裴名炎。第二句殺人賊是我、正是這前面的這個人。這第三句赶的無処蔵、拿的那厮慌也。第四句説走在井底趨、莫不這殺人賊赶的慌投井而死麼。不是這等説、這城中街巷橋梁必有按着個井之一字的去処。可着誰人幹這件事、則除是寶鑑張弘方可。与我喚將寶鑑張弘來者。

(錢可いう) (…) この四句の詩にはきつと殺人犯が隠れているぞ。もう一度読んでみよう。「非衣両把火」、この最初の句の中にあるのは名前じゃ。「衣」の字が上で「非」の字が下なら字にならない。「非」の字が上で「衣」の字が下だと、「裴」の字になるではないか。次の「火が二つ」は、二個の「火」の字を横に並べては字にならぬ。上下に書けば、炎熱の「炎」の字に他ならぬ。この殺人犯は姓が炎で名が裴か、さもなければ姓が裴で名が炎じゃ。第二句の「殺人犯はおれ」とは、さつき言った人物のこと。この「急いで隠れる場所もなく」という第三句は、そいつが慌てているのじゃ。第四句の「井戸の中に身をひそめる」というのは、この殺人犯が慌てふために井戸に身を投げて死んだということか。そういうことでないなら、この街の通りや橋にきつと「井」の一字の付く場所があるにちがいない。これは誰に任せるのがよいか。やはり寶鑑と張弘に限るだろう。寶鑑と張弘をここ

に呼んでくれ。

錢可が五衛都首領の二人を呼んでこの街の通りや橋に「井」の字が付くものがあるかどうか尋ねると、碁盤街井底巷という場所がある。そこで、二人に凶器の包丁を預け、その碁盤街井底巷に行つて、三日以内に炎裴か裴炎という名前の殺人犯を探してくるよう命じる。ここまでが第二折である。

④真犯人

第三折は、開封府碁盤街井底巷にある茶店の場面である。捜査を命じられた部下の寶鑑と張弘がやつてきて一服し、茶三婆（この折の正旦）と話を始める。するとそこへ裴炎が現れて売れ残った犬の肉を茶三婆に押しつけ、あとで代金を取りに来ると言つて退場する。

（正旦云）裴炎去丁。被這厮欺負殺我也。（寶鑑云）三婆、說誰里。（正旦云）三婆不曾說哥哥、俺這里有一人是裴炎、他好生的欺負俺百姓每。（寶鑑云）那厮是裴炎、你這里是甚麼坊巷。（正旦云）是碁盤街井底巷。有一人是裴炎、好生的方頭不劣也。

（茶三婆いう）裴炎は行つてしまった。あいつにはまったくひどい目にあわされるよ。（寶鑑いう）三婆、誰のことだ。（茶三婆いう）お役人さんにお話したことはなかったでしょうかね。わたしらの街には裴炎という者がおりまして、みんなひどい目にあつていますよ。（寶鑑いう）そいつは裴炎というのだな。おまえさんの住むここは何という街だね。（茶三婆いう）碁盤街の井底巷でございます。裴炎という者はひどく無分別でして。

茶三婆から裴炎の横暴なふるまいについて話を聞いた寶鑑と張弘は相談を始める。

(寶鑑云) 兄弟、你近前來、可是這般恁的。(張弘云) 理會的。(下)(寶鑑云) 兄弟這一去必有個主意。我且在此茶房裡閑坐、看有是麼人來。(張弘扮貨郎挑担子插刀子上科云) 自家是個貨郎兒。來到這街市上、我搖動不郎鼓兒、看有是麼人來。(裴旦上云) 妾身是裴炎的渾家。我拿着這把刀鞘兒去街上配一把刀子去。(做見張弘科)(裴旦云) 肯分的遇着個貨郎兒。我叫他過來是看咱。(拿刀子入鞘兒科云) 這刀子不是俺家的來。(張弘背云) 誰道是俺家的來。這刀子是我卖的。(裴旦云) 物見主、必索取、是我的刀子。(張弘云) 是我的。(裴旦云) 是我的。(鬧科)(正旦上云) 街上炒鬧、我是看咱。(見科云) 原来是裴嫂嫂、你鬧做甚麼。(裴旦云) 這厮偷了我的刀子。(正旦云) 茶房裡有司公哥哥、你告去他与你做個証見。

(寶鑑いう) おい相棒、こっちへ来い。こうしてこうすることにしよう。(張弘いう) 合点だ。(退場)(寶鑑いう) 相棒はきつとうまくやるにちがいない。おれはこの茶店にいて誰が来るか見てみよう。(張弘が小間物売りの行商人に扮し、天秤棒に包丁をぶら下げて登場していう) おいらは小間物売りさ。店の並ぶ通りまでやってきたからでんでん太鼓を鳴らそう。どんなお客さんが来るかな。(裴炎の妻が登場していう) あたしは裴炎の女房。この包丁の鞘を持って街へ行き、ちようどいい包丁を一本見つくりましょう。(張弘にあいさつするしぐさ)(裴炎の妻いう) いいところ、小間物売りが来たから、あの人を呼んで見てみましょう。(包丁を手にとつて鞘に入れるしぐさをしていう) この包丁はうちのじゃないか。(張弘、背を向けていう) うちのだと言うのは誰だ。この包丁はおいらの売りものだよ。(裴炎の妻いう) 物が持ち主に会えば持ち主は必ず取りかえず、と言ってね。これはあたしの包丁ですよ。(張弘いう) おいらのだよ。(裴炎の妻いう) あたしのよ。(騒ぐしぐさ)(茶三婆、登場していう) 通りが騒がしいこと。ちよつと見てみましょう。(見るしぐさ) おやおや、これは裴さんの奥さん、

何を言い争っているんですか。(裴炎の妻いう) こいつがあたしの包丁を盗んだのよ。(茶三婆いう) 茶店にお役人さんが来ておられるから、証人になってもらいなさいな。

そこで裴炎の妻は寶鑑にわけを話すが、次に引用するように寶鑑は張弘にこの女をつかまえるよう命じる。張弘はつかまえると打って自白させようとする。裴炎の妻は、自分は包丁が盗まれたと言っているだけなのになぜ自白を迫られるのかわからない。¹⁹⁾

(裴旦云) 哥哥、你看這鞘兒、是也不是。(寶鑑云) 真個是這刀子的鞘兒。兄弟、与我拿住這婦人者。(張弘云) 理会的。(做拿住打科云) 招了者、招了者。(裴旦云) 哎約、他偷了我刀子、你着我招是麼。

(裴炎の妻いう) お役人さん、ほら、この鞘がそうでしょう。(寶鑑いう) 本当にこの包丁の鞘だな。相棒、この女をつかまえる。(張弘いう) 合点だ。(つかまえて打つしくさでいう) 白状しろ、白状しろ。(裴炎の妻いう) おやおや、あいつが包丁を盗んだのに、あたしに何を白状しろと言うの。

このあとに曲が入る。第三折²⁰⁾では歌唱者は正旦の茶三婆である。「鬼三台」はこの折の六番目の曲であり、第一曲は開封の繁華な街や天下太平をことほぎ、第二曲は茶店の様子、第三・四・五曲は登場した裴炎がいかに横暴な人物かという内容であった。うたは劇中の主要人物の強い感情表現であることが多いが、茶三婆は主要人物ではないため、その曲詞は客観的な描写に傾いている。

【鬼三台】則這賊名姓、勸姐姐休爭競。

(裴旦云) 這刀子委的是我的、你怎生打我。(唱)

走将来便把那頭稍来自領、脏仗要分明、不索你便折証。小梅香死的来忒没影、李慶安險些兒当重刑。第一来惡業

相纏、第二来也是那神天報応。

(寶鑑云) 兀那厮、你快招了者。(張弘脱衣打科云) 我打這厮、招了者、招了者。(裴旦云) 打殺我也。本是我的刀子、可怎生屈棒打我。(張弘又打科云) 不招不招。你快招了者。(裴旦云) 罷罷罷、我且屈招了。

(うた) 「茶三婆」この犯人の名前について、奥さん、いいわけするのはおやめなさい。

(裴炎の妻いう) 包丁は本当にあたしのものなのに、どうしてぶつのよ。(うた) 「茶三婆」

やってきたと思ったら自分から名のりをあげ、証拠の凶器が明らかになれば、問いただす必要もありません。若い梅香は死んで影もなく、李慶安はすんでのところで重い刑罰に処せられるところ。一つには前世からの悪い業がまとわりつき、二つには天の神さまの報いでこうなつたのです。

(寶鑑いう) こいつめ、早く白状しろ。(張弘、服を脱がせて打つしぐさでいう) ほら打つぞ。早く白状しないか。(裴炎の妻いう) こんなにひどく打つなんて。元々あたしの包丁なのに、なぜわけもなく棒たたきにするの。(張弘さらに打つしぐさでいう) 打たなければ白状しないからだ。ほら、早く白状しろ。(裴炎の妻いう) ああ、もういい。ひとまず白状してしまおう。

【調笑令】你可便悄声、察賊情。

(正旦云) 司公哥哥、你来。(張弘云) 怎的。(唱)

比及拿王矮虎、先黔住一丈青、批頭棍大腿上十分楞。不由他怎不招成、向雲陽鬧市必典刑。

(裴旦云) 三婆、你救我咱。(唱)

殺麼娘七代先靈。

(裴炎帶酒上云) 問三婆討我那狗肉錢去。(見正旦科云) 三婆、還我那狗肉錢來。(正旦云) 哥哥、狗肉錢有、那鬮子裡有人喚你里。(裴炎見裴旦跪着寶鑑科云) 大嫂、你為甚麼跪在這里。(裴旦云) 我招了也。(裴炎云) 你既招了、噤死去來。(寶鑑云) 兄弟、有了殺人賊也。將這廝綁縛定、往開封府見大人去來。

(うた) 「茶三婆」 声をひそめて犯人の様子を偵察するのがいいでしょう。

(茶三婆いう) お役人さま、こちらへ。(張弘いう) どうした。(うた) 「茶三婆」

王矮虎をつかまえる前に、まずは一丈青を締めつけて、太ももを刑具の棍棒でたたかいて打てば、思わず白状せざるはいられません。刑場で必ずや死刑になるでしょう。

(裴炎の妻いう) 三婆、どうか助けて。(うた) 「茶三婆」

早いとこくたばってほしいもの。

(裴炎、酔っ払って登場するという) 三婆にあの犬肉の金を払ってもらいに行こう。(茶三婆にあいさつするしぐさでいう) 三婆、あの犬肉の金を払ってくれよ。(茶三婆いう) 兄さん、犬肉のお金ならありますが、あの小部屋であなたを呼んでいる人がいますよ。(裴炎は妻が寶鑑の前で跪いているのを見るしぐさでいう) おい、おまえはどうしてこんなところで跪いているんだ。(裴炎の妻いう) 白状しちまったのよ。(裴炎いう) おまえが白状しちまったらおれはお陀仏だよ。(寶鑑いう) 相棒、殺人犯が見つかったぞ。こいつを縛りあげて開封府へ行って長官に報告だ。

茶三婆は物語世界のなかの人物、それも脇役にすぎないが、ここではむしろ観客／読者の代弁者となっている。というのも、劇中には寶鑑・張弘の二人が李慶安の一件について茶三婆に話す場面はまったくくない。にもかかわらず、

茶三婆の曲詞には梅香や李慶安という名前が現れる。いつのまにかこの事件の真相を知っていることになっているのである。⁽²¹⁾

⑤ 李員外の逆襲

こうして真犯人が見つかった。その名は裴炎であったし、根城にしているのは碁盤街井底巷で、確かに「井底」の付く場所である。この手がかりは無実の李慶安が獄神廟で眠っているときの寝言に基づき、銭可がその謎解きをした。その結果を受けて、寶鑑・張弘は碁盤街井底巷にやってきて裴炎をとらえることができた。裴炎を直接つかまえて自白を迫るのではなく、あいだに妻が介入することでやや曲折を生じているとはいえ、単純な展開である。

第四折に入ると、裴炎を連れて役所へ戻った寶鑑・張弘が銭可に報告し、裴炎も罪を認めたため、李慶安は釈放されて家に帰ってくる。一件落着いたかのようだが、このままでは納得できないのが慶安の父親の李員外である。今度は李員外が王員外を訴えに役所に赴くのである。

(李老兒云) 大人可憐見。早是有了殺人賊、俺便無事了、若無那殺人賊呵、將我孩兒对了命可怎了。大人可憐見。常言道、告人徒得徒、告人死得死。王員外妄告不實、大人与老漢做主。(官人云) 這老的也說的是。張千、与我喚將王員外那老子来。(張千云) 理会的。王員外、喚你里。(王員外上云) 老漢王員外、衙門裏喚我、不知有甚事、我見大人去。(見科)(官人云) 王員外、是裴炎殺了你家梅香。見今有了殺人賊也。這老的說告人徒得徒、告人死得死。您与他外辺商和去。(王員外云) 理会的。(李老兒云) 大人、我其实饒不過這老子。(同出衙門科)(王員外云) 親家、親家。是我的不是了也。你饒了我罷。(李老兒云) 甚麼親家、你怎生告我孩兒是殺人賊。我不和你商和。

(李員外いう) お役人さま、お憐れみください。殺人犯が見つかったから何事もなく済みましたが、もしもあの殺人犯が見つからなかったら、わしの息子は自らの命で償うことになったのではありませんか。どうかお憐れみください。「まちがって人を徒刑の罪で告発した者は徒刑、まちがって人を死刑の罪で告発した者は死刑」と言うではありませんか。王員外はでたらめな告発をする不実の輩、お役人さま、どうかわたくしのためにお裁きをつけてください。(錢可いう) この老人の言うことももつともだ。張千、王員外のやつをここへ連れて来い。(張千いう) かしこまりました。王員外、長官がお呼びです。(王員外登場していう) わしは王員外だ。役所から呼び出されたが何の用だろ。長官に会いに行こう。(あいさつするしぐさ)(錢可いう) 王員外、おまえの家の梅香を殺したのは裴炎だった。すでに殺人犯がつかまったわけだが、この老人は「まちがって人を徒刑の罪で告発した者は徒刑、まちがって人を死刑の罪で告発した者は死刑」と言っておる。外へ行って二人で話し合おうがよい。(王員外いう) わかりました。(李員外いう) お役人さま、わしは決してこいつを許すことはできません。(一緒に役所を出るしぐさ)(王員外いう) わしたちは親戚同士、わしが悪かった。どうか許してくれ。(李員外いう) 何が親戚だ。どうしてうちの息子を殺人犯だなどと訴えたのだ。おまえと話し合うつもりなどないぞ。

そこで王員外は、嫁入り道具を用意して元の約束どおりに李慶安と結婚させるからと言って娘の閨香にとりなしを頼む。

(正旦見李老兒跪科云) 怎生看閨香孩兒的面、饒過俺父親咱。(李老兒云) 閨香孩兒、我不饒過你那老子。(正旦見李慶安云) 慶安、看我之面、饒過俺父親者。(李慶安云) 小姐、早是有了殺人賊、若無呵、我這性命可怎了也。

【喬牌兒】當日個悔親呵是俺父親、赤緊的俺先順。耽饒過俺便成秦晉、啗兩個效縹緲夫婦情。

(李慶安云) 我便將就了、俺父親、他可不肯里。(正旦云) 我去公公行陪話去。(正旦見李老兒科云) 公公、可憐見俺父親咱。(李老兒云) 孩兒也、不干你事、我饒不過他。

【雁兒落】我則是為夫呵受苦辛、告尊父言婚媾。訪賢達窮孝順、不索你相盤問。

(李老兒云) 聞香孩兒、不干你事、我饒不過你那父親。

【得勝令】您孩兒須告老尊親、不索你記冤恨。我与那慶安言婚媾、成合了兩對門。也是俺前生、赤緊的俺兩個心先順。告你個公公、你則是耽饒過俺老父親。

(正旦云) 慶安、俺父親說來倒陪三千貫緣房斷送着我与你依旧配合成親。你意下如何。(李慶安云) 既是這等、我与父親說去。父親、俺丈人說來、若是俺饒了他、他倒陪三千貫緣房斷送、將聞香依旧与我為妻。啗饒了他罷。(李老兒云) 孩兒、当初他不告你来。(李慶安云) 他告我、不曾告你。(李老兒云) 大人將你三推六問、不等你来。(李慶安云) 他打我、不會打你。(李老兒云) 若拿不住殺人賊呵、可不殺了你。(李慶安云) 他殺我、可不會殺你。(李老兒云) 我把你個強小弟子孩兒。罷罷罷、我饒了他罷。

(王聞香、李員外にあいさつして跪くしぐさでいう) どうかこの聞香に免じて父を許してください。(李員外いう) 聞香さん、わしはおやじさんを許すことはできませんよ。(王聞香、李慶安にあいさつしていう) 慶安さん、わたしに免じて父を許してやってください。(李慶安いう) 聞香さん、殺人犯が見つかったからいいもの、もしも見つからなかったらわたしの命はどうなっていたか。(王聞香)

(うた) あの日婚約を解消したのはわたしの父、実はわたしはずっとお慕いしていました。お許しただいて婚

姻を結ぶなら、わたしたち二人はむつまじく夫婦の情を交わすでしょう。

(李慶安いう) わたしはそれでもいいですが、父はうんと言わないでしょう。(王閨香いう) わたしがお父さまのところへ行つて口添えいたしましょう。(王閨香、李員外にあいさつするしぐさでいう) お父さま、わたしの父にお慈悲をお願いします。(李員外いう) お嬢さんには関わりのないこと。わしはあいつが許せないのだ。(王閨香)

(うた) わたしはただ夫が苦しい思いをしたからこそ、お父さまに婚禮の話をいたします。りっぱな人を見ならつてしっかりとお仕えし、お父さまのお叱りを受けないように努めます。

(李員外いう) 閨香さんや、おまえさんには関わりのないこと。わしはあのおやじさんが許せないのだよ。(王閨香)

(うた) 娘となるわたくしからお父さまに申し上げます、どうかいつまでも恨みをいだきつづけないでください。わたしが慶安さんと婚禮を挙げれば、両家は結ばれます。これは生まれる前からの定めでもあり、実は二人はずっと思いあう仲。お父さま、どうかわたしの父をお許しください。

(王閨香いう) 慶安さん、父は三千貫の嫁入り道具を用意してわたしとあなたを約束どおり結婚させると言っています。あなたのお気持ちはいかが。(李慶安いう) そういうことなら、父に話をしよう。父さん、(閨香の) お父さんが、許してくれたら三千貫の嫁入り道具を用意して閨香を約束どおりわたしの妻にするといいいます。許してやりましょうよ。(李員外いう) おいおい、やつはおまえを訴えたではないか。(李慶安いう) わたしを訴えたのであって、父さんを訴えたわけではありません。(李員外いう) 長官がおまえをしき

りに尋問して打ったではないか。(李慶安いう) わたしを打ったのであって、父さんを打ったわけではあり
ません。(李員外いう) 殺人犯がつかまらなかつたら、おまえは死刑になっていたではないか。(李慶安いう)
わたしが死刑になっていたのであって、父さんが死刑になったわけではありません。(李員外いう) おまえ
には根負けしたよ。わかった、わかった。許すことにしよう。

こうして、許してもらえた王員外は李員外に跪いて感謝し、ともに錢可に報告に行く。錢可は次のような判決を下
す。裴炎は金品を奪うために梅香を殺した罪により死刑。竇鑑と張弘のはたらきに対してはそれぞれ銀十兩の報奨を
与える。錢可は自らの俸給から李員外に結婚の宴席の費用を出して、李慶安と王閏香の夫婦団円を祝賀する。また、
梅香は一族で供養することとし、前任の役人は免職とする。さらに「富嫌貧悔了親事、倒陪与万貫家奩」(富者が貧
者を嫌って婚約を解消したことについては、一万貫の嫁入り道具で賠償する)も付け加えられる。

四 回復される均衡

以上のように、「緋衣夢」は、若い男女の恋と結婚が成就に至るまでの波瀾の恋愛劇という面(前節①)と、冤罪
をめぐる裁判劇という面(前節②～⑤)とを兼ね備えた作品である。本節では、この二つの面を不均衡の発生とその
解消という観点からまとめるとともに、他の作品との共通要素を指摘することにした。

「緋衣夢」において、結婚を阻む要素は両家に生じた経済的な不均衡であった。それを解決する妙案であったはず
の思いつきによって、冤罪が生み出されてしまう。裁判の公正さが失われ、もう一つの不均衡が生じるのである。こ

の不均衡が、獄神廟の靈験の力を借りつつ、裁判官や部下の知恵によって解消されたのち、経済的な不均衡によって妨げられていた結婚も成就することになる。

二つの不均衡のうち、より重大なのは、もちろん無実の李慶安が被る冤罪である。その解決は、二つの神秘的な力がきっかけとなってもたらされる。一つは青蠅の恩返し、もう一つは獄神廟での夢である。後者は前者から連鎖的に導き出されるものであり、いずれも錢可による取調べに関わっている。錢可が清廉厳正な役人であるからこそ、天の助けが差しのべられるわけだろう。ここで解決への道筋をたどってみたい。

蜘蛛の巣に引っかけた青蠅はいささか唐突に、錢可の取調べに赴く李慶安の目にとまり、父親も言うように慶安は自分の命さえどうなるかわからない状況にもかかわらず蠅を救う。蜘蛛の巣から想起されるのは元雜劇「蝴蝶夢」である。「蝴蝶夢」も裁判劇であり、包拯が蜘蛛の巣に次々に引っかけたる三匹の蝶の夢を見る。しかし、蝶は三人兄弟を表して劇の展開を暗示するだけで、解決につながる夢ではない。一方「緋衣夢」においては、蜘蛛の巣にかかっていた蠅が恩返しをする。錢可が疑問を抱きつつも死刑の判決文を記そうとすると、蠅は何度追いはらっても筆に留まっても妨害する。あたかも李慶安が救ってやったときのせりふ「我救了你非災、何人救我這橫禍」（おまえの災難を助けてやったが、わたしのこの身におぼえのない禍は誰が助けてくれよう）に応えるかのようにである。最後には筆は使い物にならなくなり、錢可はこの不思議な出来事には何か意味があると考えて、慶安を獄神廟に連れて行かせるのである。

「緋衣夢」における獄神廟とは、次のようなものである。²³ 廟は、おそらく役所に隣接する監獄の敷地内にあり、冤罪が疑われる場合に、神意をうかがうために容疑者を廟のなかで眠らせる。すると容疑者は夢を見て寢言を言う。つ

まり、裁判を司る神が、容疑者の夢の中で、容疑者を媒介として神意を伝える。寢言には事件解決の手がかりが隠されているが、それは明示的ではなく解くべき謎として与えられる。謎を解読して犯人を探し出すのはあくまでも人間の仕事とされる。

先に引用したとおり、謎は二つの事実を暗示していた。一つは真犯人の姓名であり、名前に用いられている文字を分解して示している。もう一つは真犯人の居場所である。この二つの要素が五言の詩の形式のなかに組み込まれていたわけである。この詩は、何の予備知識もない者にとっては意味不明である。しかし、劇の展開を見てきて犯人の名が裴炎であると知っている読者／観客であれば、謎の前半は容易に解くことができる。後半の居場所については銭可の謎解きを俟ってその答えを知り、その後の展開を期待することになるのである。

銭可の命を受けた部下が捜査の一環として井底巷の茶店にやってくると、折しも裴炎が登場し、展開はとんとん拍子である。張弘が小間物売りの行商人に扮して凶器の包丁を売り物にしていると裴炎自身ではなくその妻が網にかかってくる。このくだりは、元雑劇「留鞋記」で、やはり胥吏が小間物売りに扮して鞋を天秤棒にぶら下げ、反応してきた人物が手がかりとなるのと共通している。また、本稿の引用箇所「包丁」と訳している語の原文は「刀子」であるが、「刀子」が「梅香」殺害の証拠となるという点は、元雑劇「救孝子」と同じである。「救孝子」も梅香殺害の冤罪をめぐる劇であるが、推官の家の梅香であり、真相はさらわれた途上での死であって殺人ではない。

裴炎の妻が白状するのにつづいて裴炎本人が登場し、殺人犯はとらえられる。無実の人が死刑囚となり、真犯人が野放しになるという不公平は、ここに解消されるのである。しかし、このとき反撃に出るのが父親の李員外である。李員外にとって均衡はまだ回復されていない。息子が冤罪により死刑になりかけた父親としては、軽々しく訴えた王

員外を許すことができないのだ。李員外にとつて、王員外は婚約を解消したうえに息子を訴えるという二重の屈辱をもたらした相手である。何より、真犯人が見つからなければ息子が冤罪死していたことは確実なのであるから、許せないのは当然であり、「告人徒得徒、告人死得死」(まちがつて人を徒刑の罪で告発した者は徒刑、まちがつて人を死刑の罪で告発した者は死刑)という誣告反坐の法を根拠として王員外を訴える。ところが錢可は、この件については裁くことをせず、李と王に話し合うようにと命じる。なかなか王を許さない李を説得するのは王閨香、そして息子の李慶安であり、最後は慶安の説得に負けて両家の和解と婚姻を承諾する。²⁶ここで婚礼資金を王家が負担することによつて、そもそも波瀾の発端となった経済的不均衡の問題が解消されて結末を迎えるわけである。

ちなみに「救孝子」では、無実の息子を殺人犯として訴えられた母親(李氏)は真相が明らかになつたあと、個人的な恨みを述べることはない。訴えた王氏(李氏のもう一人の息子の妻の母)には判決のなかで罰が宣告されるのみである。²⁷

さらに付言すれば、本作品の恋愛劇かつ裁判劇という特徴から想起されるのが、同じく開封の市街を舞台とする元雜劇「留鞋記」である。²⁸「留鞋記」では、恋する二人が会う約束をしたことが発端となつて、女が殺人犯としてつかまることになる。つかまるのが男ではなく女であるところは「緋衣夢」とは逆であり、約束の日は元宵節、場所は相国寺であつて屋敷の庭ではないが、恋する二人が親に隠れて夜に会う約束をして、その結果冤罪が生じるところは共通している。また、文脈はまったく別ではあるが、どちらも物語に「鞋」が関わっている(ただし「緋衣夢」では男の鞋、「留鞋記」では女の鞋である)。すでに触れたように、役人の思いつく計略も共通である。²⁹

おわりに

以上のように、「緋衣夢」は類型的要素をふんだんに採り入れつつ、かろうじて統一を保っている作品であるといえよう。また、抄本にはせりふの繰りかえしが多いため、刊本はそれを大幅に刈り込んでいる。しかし、既成のモチーフの利用や一見無駄にも思われるせりふの冗漫さは、演劇を楽しむという観点から考えれば、欠点ではなくむしろ適切な工夫であったのではないだろうか。本稿においても、劇中世界の整合性よりも観客の立場を優先している箇所をいくつか指摘した。

呉晟は、宋元の都市の盛り場である瓦舎（瓦市・瓦肆・瓦子とも表記される）での演劇に見られる「繰りかえし」について次のように述べる。

瓦舎勾欄の上演は一回性の芸術である。劇本を読む場合には、何度も読み返すことができるし、読むのをやめてしばらく考えることさえできるが、観客にはそのようなことは無理である。ストーリーがやや複雑な演劇であれば、観客には、一回見ただけでは内容がよくわからないということもありうる。そのうえ、勾欄の劇場に独特の環境について言えば、当時の条件のもとでは音響や視覚の効果は高くはない。観客の流動性は特に大きく、開演に間に合わない者もいれば、途中で入ってくる者もいる。そのような観客に配慮して、勾欄の上演ではストーリーを繰り返かえすという方法を採用ことが多いのである。繰りかえすことで、たとえ遅刻や途中入場をした観客であっても、重要な場面を理解でき、ストーリーをほぼ完全に把握できるからである。³⁰⁾

市場地の勾欄における上演を考えれば、読んだ場合にくだくだしく感じるせりふの繰りかえしにも必然性がある。だとすれば、繰りかえしだけでなく、典型的要素が用いられることもまた、観客にとつてのわかりやすさや、知っていることの楽しみを重視した結果ではないだろうか。それは陳腐であるとか模倣にすぎないなどと否定的にとらえられるものではなかった。別の劇にも出てきた趣向や場面は、「あ、またあれか」と飽きられるのではなく、「あ、またあれだ」と喜ばれたのであろう。

では、その観客とはどのような人々であったのか。これについても呉晟は資料に基づき、商人が常連客であったと論じている。⁽⁴¹⁾ 思えば「緋衣夢」全篇にわたって登場する人物たちは、役人を除けばすべて開封の街の商家の人々である。王家はもちろん、李家も昔はその主人が員外と称される富裕な商家であり、裴炎もごろつきであると同時に犬肉の商売をしている。茶店の店員たちもこの繁華な街で働いている。したがってこの作品は、二人の商人の一方が貧しくなつて生じた不和が、さらなる波瀾を経て最後には婚姻という慶事を迎える劇、商人の慶祝劇であると要約することもできよう。⁽⁴²⁾

刊本は、読曲テキストであったために上演用の工夫が顧みられることはなく、せりふが大幅に省略され、裁判も一回に減らされた。一方、繰りかえしではないにもかかわらず、刊本が削除したものとして、末尾における殺された梅香への言及がある。抄本では、錢可は最後の「断」のなかで「梅香死本家超度」(梅香の死はその一族で超度すること)と述べるのである。

田仲一成は、儀礼が演劇へと転化するにあたって、孤魂祭祀に源を発する鎮魂劇を最も重視する。これには英霊鎮魂劇(英雄劇)と冤鬼鎮魂劇(公案劇)とがあり、後者が裁判劇であるのは、無名の孤魂の祭祀において、孤魂に対

する鎮撫が神仏による裁きの構造をとったことによると指摘している³³。本劇では、冤罪を被った李慶安は死を免れたが、殺された梅香は二度と帰っては来ない。思えば、梅香は仕えていた主人である閻香の幸福を願って妙案を講じたために命を落としたわけだが、その願いは最後になえられた。このような死者を超度するという一句を残している抄本は、元雜劇の古いかたちを残していると言えるのかもしれない³⁴。

〔付記〕 本論文は、日本学術振興会の科学研究費の助成を受けた「中国近世白話文学におけるテキスト生成の研究」(研究課題番号：25370406) の研究成果の一部である。

1 錢可について、吉川幸次郎「元雜劇研究」(『吉川幸次郎全集』第十四卷、筑摩書房、一九六八) は次のように論じる。

この二つ〔謝天香〕と「緋衣夢」は共に北宋の開封府尹なる錢大尹、名を可、字を可道という人物にからむ物語であるが、この人物も稗史中の名判官であつたらしい。「清平山堂話本」に収める「簡帖和尚」は、宋の話本と認められるが、この疑獄物語を解決する判官も、やはり開封府錢大尹であり、「兩浙錢王の子、吳越国王の孫」と称する。まさしく雜劇に錢塘の人とするのと、あい合するわけである。私のひそかに考えるところでは、宋の鄭克の「折獄龜鑑」包拯の条に、「按ずるに近時の小説に、朝散大夫錢蘇の一事を載せて云う」云云として、その秀州嘉興県の知事であつた時の断獄の逸話を付記する錢蘇が、すなわちその人ではないかと考える。蘇と可とは音が近いし、錢蘇は趙景深氏の「小説間話」によれば、錢鏐の弟であるという。しからば蘇は錢彦遠の子、錢易の孫、吳越の廢王錢俶の曾孫にあたるわけであつて、まさしく「兩浙錢王子、吳越国王孫」であるからである(二〇四頁、〔一〕内は廣瀬による)。

2 孫楷第『也是園古今雜劇考』(上海出版社、一九五三)によれば、脈望館抄本には内府本・于小穀本・來歴不明本の三種が

あり、この劇は来歴不明本である。

3 二種の刊本のあいだの本文の異同はきわめて少ない。冒頭のタイトルはいずれも「錢大尹智勘緋衣夢」であり、古雑劇本では作者名に続けて冒頭に正目の「王閨香夜闌四春園 錢大尹智勘緋衣夢 李慶安絶処幸逢生 獄神廟暗中彰顯報」があり、古名家雑劇本では末尾に題目正名「王閨香夜闌四春園 錢大尹智勘非衣夢 李慶安絶処幸逢生 獄神廟暗中彰顯報」がある（古雑劇本との違いは「緋」と「非」のみ）。これに対して抄本は冒頭のタイトルが「王閨香夜月四春園雜劇」であり、末尾の題目が「錢大尹智取賊名姓」正名が「王閨香夜月四春園」である。王家の庭の名が四春園なのだろうと推測されるが、抄本の本文中には四春園という語は登場せず、刊本では曲詞に一箇所のみ見られる。

4 巖敦易『元劇斟疑』（中華書局、一九六〇）、上冊三五二頁。

5 小松謙『中国古典演劇研究』第六章「明刊諸本考」、二二九頁。（ ）内は廣瀬による。

6 抄本を用いるのであれば劇のタイトルを「四春園」とすべきところだが、本劇は「緋衣夢」が通称となっているため、抄本を含めた三種をすべて「緋衣夢」と称する。

7 元雑劇の裁判劇では多くの場合、有能な役人が裁きを行う前に、まず無能な役人による取調べの場面がある。役人は仕事を胥吏（令史や外郎と呼ばれる）に任せきりにし、胥吏は指で合図して賄賂を要求し、拷問で無実の罪を自白させるといのが常套である。したがって刊本においても、この展開を予測することはできる。

8 以下の引用は脈望館抄本「王閨香夜月四春園」による。

9 「脚線」は後出箇所（本稿では引用しない）では「線脚」となっており、「線脚」が正しいであろう。

10 「是看」は「試看」と解する。

11 刊本では「金銀財物」に作る。

12 この約束は梅香が慶安に金品を渡すためのものだが、その約束をしたあとの曲詞やせりふは閨香との密会を思わせ、結局ど

ちらなのか曖昧である。

13 冒頭の王員外のせりふで閨香は十六歳（刊本では十七歳）とされている。指腹成親の婚約者にもかかわらず年齢に差が生じてしまっている。

14 牢屋に入っている李慶安を召喚するのは当然であるが、父親の李員外と一緒に登場するのは不可解である。ただし、あとの展開のためには、確かに父親の存在は不可欠である。

15 せっかく再度の取調べが行われているのに李慶安が申し開きをしないのは不可解であるが、もしも申し開きをして銭可が判決文を書くのをやめると、このあとの展開が成立しない。また、たとえば元雜劇「魔合羅」では、胥吏に滅多なことを言うとか殺すと脅されていて申し開きができないという設定になっており、暗黙のうちにもそのような前提があるのかもしれない。

16 「門」は底本では「裡」に作るが、続いて「(外郎云)可早来到也。你入廟去、我倒拽上這門、我将着這紙筆、聽他說甚麼」という箇所もあるため、「門」に変えた。

17 これは寝言を書き取ったものであるから、文字表記は意味によって決まるはずである。原文に「非衣両把火」とあるのは、すでに「裴」の字を導き出すことを前提としているためで、そうでなければ意味から考えて「緋」と書き取るであろう。「緋」から同音の「非」を導き出す過程があってもいいわけだが、それは省略されている。

ちなみに、この裴炎の名を分解した謎は、唐代の实在の人物裴炎にまつわる、次のようなエピソードから着想されたものである。裴炎が中書令であったとき、徐敬業と駱賓王が則天武后に対して反乱を企てる。駱賓王は裴炎を仲間引き入れるために童謡を作って子どもたちに歌わせたのだが、その歌詞が「一片火、兩片火、緋衣小兒當殿坐」であった（『朝野僉載』巻五）。

18 注10に同じ。すぐあとの正旦のせりふも同じ。

19 本劇のここまでの流れを知っている観客／読者に対しては、これでも理解可能であるが、物語世界の人物にとっては説明不足と言わざるをえない。これを物語世界が十分に自立していないと解釈することもできる。刊本では、鞘に言及することはなく、

次のような展開となっている。

(浄旦見科) 司公哥哥、這刀子是我家的、這漢子偷了我的。(寶) 将来我看。(做看科) 元来王員外家梅香是你殺了。(浄旦) 不干我事、我並不知道。

(裴炎の妻、あいさつするしぐさ) お役人さま、この包丁はうちのものです。この男が盗んだのです。(寶鑑) どれどれ見せてごらん。(見るしぐさ) なんと王員外の家の梅香を殺したのはおまえだったのだな。(裴炎の妻) あたしには関わりのないこと。何も存じません。

つまり、寶鑑が王員外の家の梅香殺しの件について追及していることが明示されているのである。刊本は概してこのような合理化を行っている。

20 刊本では第四折前半。

21 注19で述べたように、刊本では寶鑑が王員外の家の梅香に言及しているが、李慶安の名は出していない。ちなみに刊本では、裴炎の妻の自白は「我招了者。是俺丈夫裴炎殺了王員外家梅香、因財致命来」(白状します。あたしの亭主の裴炎が王員外の家の梅香を殺しました。金品を盗もうと命を奪ったのです)である。抄本では裴炎の妻が何を白状したのかはつきりしないが(自分が殺したと白状しているようにも取れる)、刊本では夫の犯行を告白していることが明確である。

22 「訪」は「仿」と解釈する。

23 獄神廟については、李喬『中国行業神崇拜』(中国華僑出版公司、一九九〇)が資料に基づき、その歴史や具体的な神名について解説している(三五八―三六三頁)。

また、廟で夢を見て真実を知るという要素を含む元雜劇に「崔府君断冤家債主」がある。第四折で、家族がみな死んでしまった正末が城隍廟でその運命を嘆くと、ふいに睡魔に襲われ、夢の中で冥界に行つて閻羅王や死者に会い、真実を知るのである。一方、廟という場所とは無関係だが、唐代小説「謝小娥伝」では、小娥の夢に殺された父と夫が現れ、「殺我者、車中猴、門

東草」などと、やはり漢字を分解した謎のかたちで犯人の名を教える。いずれにおいても夢は冥界への通路として機能しており、死者から真実が伝えられるのである。「緋衣夢」で、李慶安が「犯人はおれ」とあたかも犯人が自供しているかのような寝言を言うのは異色である。このあと寝言を書き取った外郎がそれを読み上げ、銭可が「犯人はおまえか」と外郎を捕らえようとするが、この諧謔の効果をねらったものとも考えられる。

24 廣瀬玲子「おおわれた真実——元雜劇「救孝子」「殺狗勸夫」試論——」（『専修人文論集』91、二〇一一）参照。

25 このような原則は唐の律令にすでに定められていた。滋賀秀三『清代中国の法と裁判』（創文社、一九八四）は次のように述べる。

唐の律令に現われる裁判制度にはかなり鮮明に訴追主義——もちろん私的訴追——が貫かれていた。（…）訴え無ければ裁判無きことを原則的に宣言し、そしてさような訴えを提起する者には重大な責任——訴えられる者が蒙る危険と正確に匹敵するだけの危険——を引受けさせようとするのが唐律令の建て前であった。訴えが虚構であることが判明したときは、原告は、訴えがもし真実であったならば被告が受けたであろうと同じだけの刑罰を受けなければならない。これを誣告反坐の法という（六三—六四頁）。

26 刊本は、李員外が王員外を訴えてから、説得されて許すまでのせりふの分量を三分の一以下に減らしている。しかし、この場面の状況を考えれば、抄本の李員外の饒舌はきわめてリアルである。

27 「救孝子」の現存テキストは元曲選本のみである。

28 廣瀬玲子「誰も死なない——元雜劇「留鞋記」試論——」（『中国哲学研究』24、二〇〇九）参照。

29 ただし、「留鞋記」では死んでいると思われた人が実は意識を失っていただけであったため、殺人は起こっていない。

30 呉晟『瓦舍文化与宋元戲劇』（中国社会科学出版社、二〇〇一）、二二三—二四頁。

31 同上、一〇九—一一〇頁。

32 元雜劇の裁判ものである「魔合羅」「勘頭巾」「留鞋記」「殺狗勸夫」などにおいても商人あるいは行商人が主要な役割を果たしている。商人たちは、あるいは市場地に店を構え、あるいは近隣からやってきて市場地で商売をする。市場地には瓦舎があり、劇が上演されていた。裁判劇に商人がよく登場するのは、彼らが観客として想定されているのではないか。そしてさらに、商人が金銭に関わるもめ事に巻き込まれやすかったからではないか。

ちなみに、登場人物名などは異なるが「緋衣夢」とほぼ同じ展開を見せる戯曲が南戯や各種地方劇にも見られることは、この話柄の人氣を物語っていると見えよう。詳しくは、陶君起編著『京劇劇目初探』（中華書局、二〇〇八）一七一頁の「血手印」の項、趙興勤・趙韡「閩漢卿《緋衣夢》雜劇之情節蛻變」（『古典文学知識』二〇〇六―一）を参照。

33 田仲一成『中国演劇史』（東京大学出版会、一九九八）、一一一頁、一二三頁。

34 「救孝子」では、判決に梅香への言及はない。

Recovering the Balance: A Reading of Yuan Courtroom Drama *Feiyimeng* 緋衣夢

by HIROSE Reiko

Feiyimeng 緋衣夢 is a piece of courtroom drama which deals with a murder case. The author attempts to prove that this drama enacts the process of recovering some imbalances among characters.

The plot is as follows: Li Qing'an 李慶安, a son of a merchant, has been engaged to Wang Runxiang 王閏香, a daughter of another merchant. Their fathers used to be good friends, but as the Li family gets poor, father Wang decides to cancel the engagement. Wang Runxiang comes up with the idea of sending some valuables to Qing'an to make betrothal money. One night, just before Qing'an comes to Wang's garden to receive it from her maid, a villain called Fei Yan 裴炎 sneaks into the garden, kills the maid and steals the money. Runxiang's father accuses Qing'an as murderer, and the officer falsely gives a sentence of death on him. As new judge Qian Ke 錢可 arrives at the office and reinvestigates the case, supernatural force prevents him from execution of Qing'an. Qian Ke then makes Qing'an sleep in the prison shrine. The words Qing'an says in his sleep forms a puzzle, so Qian Ke solves it and gets the murderer's name. Even though the murderer is caught, the case is not yet settled, because Qing'an's father condemns Wang in turn for the false accusation. Runxiang apologizes for what her father has done and persuades Li to excuse him. The proposal of Wang family, to take care of all the betrothal money to compensate the injustice, is finally accepted by Li. Judge Qian Ke decides to give a banquet to celebrate their marriage.

The author's reading is as follows: The drama begins with the economic gap between two families. The imbalance finally leads them to the court, and culminates in the death sentence. At the last moment, with the help of

supernatural force, the judge is able to reveal the truth and all the imbalances are redressed at the end. The finale is the marriage which offers prospects for prosperous future of two families.

Also, in *Feiyimeng*, there are several elements that are common with other Yuan courtroom dramas. They must have served to make the audience feel familiar and enjoy the performance.

The author thus concludes that we can situate *Feiyimeng* as a drama of celebration for merchants in the cities, which presents a phase of theatrical evolution from consolation of wandering spirits to secular entertainment.